山と博物館

第41巻 第6号 1996年6月25日 大町山岳博物館

南アルプスと雲海（八ケ岳・富士山） 撮影 増村 征夫

安曇野を見下ろす

村松 哲彦

残雪を踏んで立った爺ケ岳山頂からは、かすんで視界が効かなかった。がっかりした。

その事実に気づいたのは九年ほど前の、やはり五月の爺ケ岳。大町市街地から南安曇方面が眼下に一望できた。どの水田にも水が張られたばかりで、逆光に水面がきらめき、あたり一面湖水のようだ。市街地も国道もただの浮草に過ぎない。むかし安曇野は湖だったんだよ、と年寄りの声で昔語りがどこからか聞こえ、泉小太郎伝説を、伝説に材に取った松谷みよ子の「龍の子太郎」を思い出さないわけがない。そうか、あの伝説を伝えた者はここからの景色を見たことがあるんだと、素直に少年に戻る。しかし、龍はどうだ。なぜ龍なのだ。長く残る疑問だった。

その龍をみたのは、さらに数年後の桜のころ。陽春特有の突風が地表近く雲を押しつけ、穂高から松川、常盤と、高瀬川西岸を北上してゆく。雲の先端は激しく形を変え渦を巻き、見たこともない変化の様相を現しながら安曇野の地表近くを這いながら突進してくるのだ、鎌首をもたげ長い胴と手足をうごめかしながら。これで龍でなくてなんだ、と声に出し、車を止めて見入った。

たぶん前線が激しい勢いで北アルプスを乗り越え里の空気を押し込んで作った水分と風の織りなす変化の妙だ。そう納得しつつ、在住数年のIターン者が、この土地に生まれた者とて一生のうちに必ず見られるとは限らない幸運を見た思いに身が震えた。

当地で見る雲は、たとえば夏の雨上がりに綿をちぎって北アルプスにつけたような、また空を行く巨鯨のような、ある時は手に取って飛び乗ってみたくなるような、孫悟空の觔斗雲もかくや、おうい、雲よ、と眺め入ることが多い。觔斗雲もきっとこういう地形に住んだ中国人が考えたのだろう。

山に囲まれたわが安曇野はまことに雲と水と光の谷間、伝説の生まれる里である。

（日本山岳会員＝大町市在住）

山の世界の同田貫（どうたぬき）
―二村ピッケルの誕生―

黒田圭助

一、発端

もう三十余年も前の昔話で、私も大体の粗筋しか覚えていないけれど、記憶の未だボケないうちにと思い、山岳博物館の依頼に応ずることにしよう。

一九五九年の初夏であったが、用事の途中で白木屋（今の日本橋東急）の前を通りかかったところ、夏山の展示と相談の会が開かれており、多少の時間もあったので、弥次馬根性を出して見に入った。今と違って新しい技術や用具がそれほどある訳もなかったが、展示してある欧州物のピッケルの解説に、何箇所か変な部分が見受けられたので、係の人を物陰に誘い、他のお客さんにはわからぬように、ソッと小声で御注意したところ、「一寸待って下さい」と待たされた末、係員の詰所へひっぱっていかれ、初めて顔を会わせたのが、カメさんこと碓井徳蔵君である。少し話しているところへ、この催しの親分?と思われる、背の高い紳士が姿を見せ、色々な質問と意見の交換になった。その結果が「原稿を書いて欲しい」ということなので、「K山荘のNさん、Uさんといった著名な方々が書かれているから」とお断わりしたところ、「あの人達はプロだ、仕事上の支障もあるからはっきりと書けない点も多々ある。更に新進の作者を出すためにも是非書いてくれ」といわれたが、これが当時「山と渓谷」の編集局長をしていた、岡部一彦氏との出会いで、この岡部氏の一言と情熱が無かったら、海軍の造船官を志望した、軍事科学好きの青年と、少年飛行兵の夢破れた野鍛冶の結びつきは、恐らく永遠に無かったであろう。

二、二村君との出会い

敗戦でパイロットへの道を断たれた青年は、蒲郡の刀匠藤原武則氏のもとでの修行を終え、郷里拳母町（今の愛知県豊田市）に帰って農具鍛冶をしていたが、友人に頼まれて見様見まねのピッケルを打つと、見てもらう知人もいなかったので、名古屋のS山荘へ教えを乞いに行ったところ、「日本には山内、門田と云う名工がいるんだ、お前ら田舎の野鍛冶なんぞは、土百姓のスキやクワでもひっぱたいてろ！」の一言で、見向きもせずに追返されたという。人間どんな人でも頭ごなしにケナスものではない。一本気で真正直な人ほど、一念発起したエネルギーは恐るべきものとなる。根が「祖国防衛のために生命も捨てよう」という少年兵だ。飲めない酒をムリに飲み、「今に見ろ！キットこの仇は討つぞ」と心に誓うと、男泣きに泣きながら、名古屋から豊田市まで、夜道を歩いて帰ったそうである。

これが縁というものだろうか？岡部氏の依頼を受けた私の提案を記した「山と渓谷」を、二村君の友人が見たのはこの数日後であった。

「善さん（本名は二村善市）、一人口惜しがってもダメだ、この人に相談して見ろや！教えてくれるかも知れんもんで」。二村君の手紙を受けた私は、「わざわざ相州まで見えなくともよし、近日仕事で関西へ行くから、帰途名古屋へ寄ることでもあり、その時まで待ってもらえるなら、そちらで御目にかかる」と返事した。やがて秋も深い豊田市駅で初めて会った二人は、深夜まで話し合った末に、力を合わせて新作のために努力することを約したのである。

三、恩師山内東一郎氏の教え

以来五年近くの苦しい時が流れる。特殊鋼といっても刃物鋼、工具鋼、構造鋼の種別に加え、何鋼の第何種と細かい配合が違い、当然熱処理も違ってくる。クライマーの実用テストは勿論だが、私達は金属材料の面からも、専門技術者の冶金学の裏付けが欲しかった。結論をいえば、日本刀の伝統工法である焼刃土、目釘穴の開け方、ビエルンシュタット（ベルン）の侵徹性、山内作の接合法、シャルレの使い易さに加えて、日本海軍の九一式徹甲弾の破砕力（ピッケルに要求される切味は、刃物のような切削力ではなくて、ブルーアイスも叩きこわす力）に加えて、大同製鋼中央研究所の温かい協力をいただけたことで二村ピッケルはうまれた。市販は七号からだが、この少し後、新聞で富士山測候所の苦心を見、カメさん、二村君、私の三人で各一振を負担し、寄贈しようと気象庁へいったところ、後に文士に転じたFという課長が、「役所は仕事で山に登っているんだ。そんな役にも立たない物はいらん、強いてというなら夏になったら試してやるから、御殿場の測候所へ持って行け」というので、「天気屋が山へいくのがそんなに偉いか？」と私達は腹を立て、この時の作品は全部RCCⅡのクライマー達にあげてしまった。私の名を入れた作を手にしたのが青木洋君（後のRCCエヴェレスト南壁隊登攀隊長）である（他の二本は不詳）。

この日の午後、日本山岳会の折井健一氏から、「近日外務省の招きでエヴェレストのサミッター（初登攀者）テンジン・ノルゲイ氏が来日する」と聞き、インド国立登山学校と、テンジン氏への寄贈に目標を絞ると、二村君は精進して三五、三六番の二作を鍛え、日本山岳会の歓迎会に間に合わせた、時に一九六四年二月である。

折井氏の温情に接した私達は、無理を承知で山内氏の指導をお願いしたところ、日本山岳会仙台支部の北川氏を通じて連絡がとれたので、早速に二村君を東京へ呼び寄せると、

テンジン氏のサインと目釘穴の工法

二人は春未だ浅い国道四号線に車を走らせた。二村作六〇番と組み立て前の各部品を携行して……。

青葉城の麓に山内老を訪ねると、気持良く応対して下さり、製作工程の写真を見て色々に専門家同士の話をされた末、「人それぞれに工法が違う、技術の指導などは出来ない。教えられるのは製作に当たる精神だけだ!!人間何ごとにも馬鹿にならにゃあ良い仕事は出来ん。利口ではダメだ、バカになれ」という言葉の後に、「銘は私より旨いな、良く考えているが石突だけは私の方が進んでいるよ、見なさい、工作はこうしてやるんだ」と、御自分で工夫した工具まで示して、詳細に教えて下さったものである。眼の前で二人の作者のやり取りを見ていた私は、昔国語の教科書にあった賀茂真淵と本居宣長の話を思い出し、胸が熱くなったのを今でもはっきりと覚えている。

この後いくらもたたぬうち、山内老は火事で家財その他を失い、この失意からであろうが、翌年早々に世を去られている。私達二人にとっては文字通り「松阪の一夜」の、師弟の縁であった。

テンジン氏に寄贈された二村ピッケル
（週刊新潮，1964.2.24号より）

四、「三州猿投山麓住善則」の秘密

日本刀の焼入れに使う焼刃土（刀身に特殊な粘土を塗って、焼入れをコントロールする）は、各刀匠の秘密とする所で、門外不出の配合比である。これにはさすが豪気の二村君も施す術が無かった。万策尽きて恩師の前に両手をついた時、私の手紙を二度三度と繰り返し読み終えた今は亡き藤原武則氏は、しばらくジッと考えた末に、「よし判った、教えてやろう。だが未だ息子にも云うな!!あれはまだ修業が足らん。但しこの配合はあく迄も玉鋼（和鋼の種類）の場合で、SNCMの様な合金鋼に向くかどうかは全く不明だぞ!!後はお前の工夫を加えて、合金鋼に向いた配合を見出せ」と言われたそうである。

シャフト材のヒッコリーは、女子陸上界の名コーチと謳われた、京都光華学園の故小池良一氏の紹介を得て、美津濃の養老工場から廻してもらうことが出来たし（消防車の梯子の先端部を作っていたから）、ここに世の方々の厚情を得て、ようやく自信の持てる作品の誕生を見たので、私は真空炉で熔解した鋼材（これも大同製鋼の御厚意による）に限り、「三州猿投山麓住善則」（サンシュウサナゲサンロクノジュウニンヨシノリと読む、刀工は人の字を刻まないのが原則）と銘を切ることに決めた。

目指す用途こそ全く異なるけれど、鍛えは床の間の飾りではなく、切味を誇った実戦の名刀同田貫（肥後の領主に任ぜられた加藤清正が、各地に散って農具鍛冶になっていた延寿一門の刀工達を呼び集め、大きな保護を加えて実戦専門の名刀を作り上げた。折れず、曲がらず、良く斬れるだけの実用品だから、スタイルは地味で、刀剣商の評価も低いが、その実用価値は知る人ぞ知る）と同じである。

内外を問わず、どこのピッケルもピックの先端を尖らせたり、ノミ型にしているけれど（山内作だけは丸めている）、これでは堅い氷を切るのが大変である。ほぼ完全な直角に当たらぬ限り、力が逃げて容易に破砕出来るものではないからだ（ダブルアックス用は切味でなく、突き刺す力を要求されるから、ノミ型にせざるを得ないが）。相手が堅い程先端を平面にして、コーナーで叩きこわす必要がある。これは一寸考えると理に合わない様だが、一九二一年の海軍休日の結果、最新鋭の大戦艦「土佐」を廃艦するに際し、実弾射撃の目標として、思う存分のテストをした末に、日本海軍が導き出した極秘の弾丸の型であり、今次の大戦では、日米両軍の大型砲戦は見られなかったが、この日のあることを想定した、恐るべき砲弾の破砕力を応用した、私達の着眼であった。

誕生以来三〇余年、制作番号も既に二千を超えているけれど（最初から四を欠番にしているから、百といっても八十一しか無いのだが）、ふり返って見ると、随分長いようでまた短い道のりであった。相見ることもなかったであろう二人の青年も、いつしか孫を持つ年齢に達した今日、不離一体の協力者を思う時、期せずして二人を結ぶ貴重な機会を作ってくれた、岡部氏と山と渓谷社に、心から「有り難うございました」の御礼を述べて、二人の作品誕生の内訳話を終えたいと思う。

（登歩渓流会
日本体育学会体育史専門分科会）

1995年　二村作2362番　製作者贈（大町山岳博物館 蔵）

浦松佐美太郎さんを憶う

丸山　彰

燕山荘初代の主、赤沼千尋さんよりお招きがあり、有明のお宅へお伺いした。昭和三十四年の秋であった。お宅には既に来客があり、私を待っていてくれた。その人は、著名な登山家で著述家でもある浦松佐美太郎さんであった。浦松さんとの初めての出合いである。

ヨーロッパアルプスのウエッターホルン西山稜の初登。イギリスの登山家・ウインパーの書いた『アルプス登攀記』の日本語訳など偉大な業績を持った方でありながら、温厚でやさしく、初対面の私にも親しく話をしてくださった。

話題は山の話が中心で、なかでも浦松さんが北アルプスを歩くとき、いつも一緒に連れて歩いた有明の名ガイド中山彦一さんのことに及んだ。彼は昭和七年三月、常念岳一ノ沢において雪崩のために亡くなった。大事な山友達を失ったと浦松さんは長い年月を経てもなお哀惜の念は深く、その人を思う強い気持に私は打たれた。話は尽きることはなかったが、私は先に辞して帰ってきた。緑の樹木に囲まれた静かな赤沼邸での語らいを今も忘れない。

浦松佐美太郎さんからの手紙

昭和三十六年六月、私の勤める大町北高等学校での講演をお願いし、序に小谷温泉へ新緑を探るよう計画、お忙しいなかを割いて、おいで頂くことになった。講演は現代の高校生の勉学について、著述家らしいお話をしてくださった。話を終って、東京からお連れしたお嬢さんと赤沼さんが加わって小谷温泉へと向かった。温泉の周辺は、まだ残雪があり、早春の気配がいっぱいだった。幸い晴天に恵まれ緑の風が快かった。

大変に喜ばれた様子は、帰ってから頂いた手紙によく書かれていたが終りに私への叱責の言葉があり、さすがアルプスの氷壁で鍛えられた人の言葉は厳しく、胸にこたえた。

〝ご親切なご案内のお陰で初夏の小谷温泉をこの上もなく愉しみました。山を降って無事大町着、そのまま電車で松本に至り、赤沼氏と晩食を共にして東京へ夜行で帰りました。

仕事の骨休めがこんなにも楽しく過ごせましたことを厚くお礼申しあげます。採って頂きました山菜はあまり大量なので親しい人たちにもお分けしました。これも厚くお礼申しあげます。娘は生まれて初めて岩魚を食べた味が忘れられず感謝感激しております。私も戦後初めての岩魚なので大変嬉しく思いました。もしあの時前もってお願いしておきましたように講演の謝礼や温泉の宿料などいっさいご配慮なく私の気ままに自由にして置いてくださったらなお一層楽しかったであろうにとそれが残念でなりません。

人がお願いしたことは聞き届けて欲しいものです。私も貴方の頼みで講演を引き受けたのですから私の頼みも快くお引き受けくださり私を快くそのまま自由人として放っておいてくださったらどんなに気持ちがさばさばしてよかったろうにとそれだけが今度の旅の傷でまことに残念でなりません。お礼まで、佐美太郎。〟

小谷温泉の浦松さん（1961，後方は雨飾山）

厳しい言葉に、私は恥じ入るばかりだった。

イギリスの登山家ウインパーが書いた名著『アルプス登攀記』を浦松さんの豊かな語学力と努力で、日本語に訳し、岩波文庫上・下巻にまとめ昭和十一年五月に出版された。

原著は登山文学の古典中の古典とされ、世界の多くの人に読まれ大きな影響を与え、大勢の優れた登山家を育てた。わが国では、昭和十一年翻訳が完成。待ちわびた、登山家に読まれ、新しい登山の思想、技術等を学ぶことができた。わが国登山界に与えた功績は、多大なものがある。版は次々と改められ、今では四十版を超えているはずである。後世に残る書物となるだろう。

ご自身の著書『たった一人の山』も名著である。

ウエッターホルン西山稜の初登記のほか、基地グリンデルワルトで過ごした思い出などが、美しい文章で、次のように綴られている。

〝夕陽がクライネシャイデックの峠の彼方に沈む暫しの間、谷の山々は赤々と燃え上がる。山の岩に雪に真っ赤に燃え輝く夕陽が、やがて麓の森から這い登る紫に暗い夕闇に追い上げられて、高みへ高みへと縮まってゆく。しまいには、頂上の一端に小さく小さく、そしてふっと消えてなくなる。その瞬間、谷にしんとした夕暮れが、一度に落ちてくる。谷に住む人も、牧場の牛も羊も、ひっそり静寂のうちに沈む。〟

濃やかな描写で埋められる、昭和三十三年出版のこの本は、私の好きな本である。

（大町山岳博物館顧問）

訂正とお詫び

第41巻第5号に掲載されました表紙写真の撮影者の氏名に誤りがありました。縣宗市氏に訂正させて頂くとともに、お詫びします。

山と博物館第41巻第6号
一九九六年六月二十五日発行
発行所　〒398 長野県大町市　TEL㉒〇二一一
大町　山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額　一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇－七－一三一九三